とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	板橋区成増１-３５-２６
園名	成増すみれこども園

１．活動のテーマ

<テーマ>

「やってみよう」
～様々な道具や素材を使った遊びの中で、様々な体の動きと試行錯誤を楽しむ～

<テーマの設定理由>

固定遊具が少ない環境を「試行錯誤の宝庫」と捉えている。
遊具が少ないことで特定の遊びに固定されることなく、子どもたちが自ら遊びを創造する必要性が高まっている。多様な道具や素材を「遊具」に変える発想力と、試行錯誤を促す探究心を育むためにこのテーマとした。

２．活動スケジュール

・子どもの興味関心から、運動用具（巧技台や大縄跳びなど可動式のもの）を設置してみたり、子どもがどのように遊びだすか観察をする。
・何度も繰り返し挑戦したり、試行錯誤出来る環境を確保する。（時間、場、安全等）

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

≪未満児≫
素材・道具：マット、巧技台
環境の設定：マットをフラットに敷き、素材の感触に慣れ親しむ「マットと仲良くなる」環境を整えた。子どもの慣れに合わせてマットの下に芯材を入れ、意図的に高低差や傾斜を設けることで、全身を使って動きたくなる環境へと構成した。
≪幼児≫
素材・道具：段ボール、廃材、ガムテープ、各種ボール、大縄、サーキット用具
環境の設定：ボール遊びの発展：バスケットボールへの興味に応じ、段ボールでゴールを自作できるコーナーを設置。完成後は高所に固定し、シュートを楽しめる場を構成した。
動的な環境（サーキット）：平均台、鉄棒、飛び石を組み合わせ、全身を使って遊べる動線を確保。大縄を加え、多様な身体活動を誘発する環境を整えた。

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

≪未満児≫

活動の導入と環境の変容

マットをフラットに敷く「素材に親しむ期間」から開始。習熟に合わせて意図的に高低差を設け、自ら場を構成（マットの積み上げ等）したくなるような環境を整えた。

保育者の援助と見守り

巧技台の導入時は具体的な遊び方を提示せず、自由な探索を見守ることで、各自が身体能力に応じたアプローチができるよう配慮した。

心理的安全性と意欲の誘発

不安を感じる子には、無理に促さず「友だちの楽しそうな姿」を観察できる距離感を保つことで、安心感から自発的な意欲への転換を促した。

社会性の育ちへの配慮

ルールを教え込むのではなく、遊びの構造の中で自然と「待つ」「順序」を意識できるような動線設定を行った。

≪幼児≫

課題解決と環境の創造（バスケット・大縄）

バスケットボールへの興味に対し、段ボールでゴールを自作するなど、自ら解決策を見出す姿が見られた。また、大縄では当初の「跳ぶ楽しさ」から「回し手」への興味が広がり、試行錯誤を経て、自分たちで声を掛け合い交代しながら遊べるまで習熟した。

主体的な場づくり（サーキット遊び）

当初は保育者が設営していた環境に対し、次第に「難易度を上げたい」「こう設置したい」という思いが芽生え、自ら場を構成するようになった。多様な器具を使い分け、自ら考えた環境で体を動かすことに、大きな達成感を味わっている。

他者との共有と喜び

当日は、体を動かす爽快感に加え、保護者に見守られる喜びを全身で感じていた。自律的な環境構成と新しい挑戦を同時に楽しむことで、心身ともに大きな成長が見られた。

自信の深まりと表現への意欲

自由遊びでの反復した経験が「できた！」という達成感に繋がり、その自信は「誰かに披露したい」という意欲へ発展した。発表会では自ら「運動」の項目を選択し、本番まで自主的に練習を重ねるなど、更なる上達を目指す主体的な姿が見られた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

≪未満児≫

主体的な探索と挑戦

遊び方を固定せず見守ることで、自ら巧技台へアプローチを開始。梯子をまたぐ、台からジャンプするなど、自身の身体能力に応じた多様な動きを展開した。

模倣から意欲への変化

当初、不安で遠巻きに見ていた子も、楽しそうな友だちを観察するうちに安心感を得て、自ら一歩を踏み出す「意欲の伝播」が見られた。

環境への適応と要求

「マットと仲良くなる」段階を経て高低差を導入。慣れるに従い、自らマットの積み上げをリクエストするなど、より強い刺激を求める主体性が芽生えた。

自然な社会性の育ち

遊びの流れの中で、友だちの後ろに並んだり動きを待ったりと、教え込まれるのではなく自然な形で「順番」という社会性の基礎を経験している。

≪幼児≫

課題解決と創造的な遊び

バスケットへの興味から「ゴールを自作する」解決策を見出し、段ボールで制作。既成概念に捉われず、自ら環境を創り出す達成感と挑戦を楽しんだ。

主体的な場づくりと習熟

サーキットの設営や大縄の回し手など、当初の「使う」側から「運営する」側へ関心が移行。試行錯誤を経て、自分たちで声を掛け合い交代や難易度調整を行う姿へと成長した。

自信の深まりと表現への意欲

反復した成功体験が「誰かに見せたい」という意欲に繋がり、発表会の種目も自ら選択。自主練習を重ね、本番では保護者に見守られる喜びを全身で実感していた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

≪未満児≫

心身の統合的な育ち

動的な遊びを通じた「身体知覚」の向上を確認。友だちを観察する時間を保障したことで、不安を自ら乗り越える「自己決定」と「勇気」の育ちを実感した。

主体性と創造性の発現

あえてルールを提示しないことで、子ども自身が「どう動けば面白いか」を探究し、多様な動きや環境のカスタマイズ（学びの主体者）が引き出された。

自律的な社会性の芽生え

楽しさを共有するために自然と順番を待つ姿が見られ、ルールを「守らされるもの」ではなく「円滑に遊ぶための仕組み」として体験的に理解する過程を再確認した。

保育者の役割の再定義

心理的安全性を守り、結果だけでなく「工夫のプロセス」に共鳴するフィードバックを行うことで、子どもの自己効力感がより高まることを確信した。

≪幼児≫

課題解決と知的な身体活動

「ゴールがない」「難易度を上げたい」といった課題に対し、自ら考え工夫する力が育った。身体的欲求が思考や社会性を動かす原動力となり、環境を自ら構成するプロセスが、技能習得を超えた「知的な探究」へと深まった。

主体性と自己肯定感の育ち

自ら難易度や役割を選択・調整することで「自分の力で環境を変えられる」という有能感が育った。この自信が、発表会という大舞台へ自発的に挑戦する心の基盤（非認知能力）となった。

意欲の連鎖と協同性

「できた」が「披露したい」へ繋がる意欲の好循環が見られた。物作りや場作りを通じ、他者と協力・調整しながら目標を達成する社会性も培われた。

今後の展望

意図的な環境構成と、子どもの主体性を尊重する「見守り」のバランスを重視し、今後も心身が一体となって躍動できる探究の場を保障していきたい。